

社会学における生活研究の検討

——枠組設定の為の覚書き——

玉 水 俊 哲

一 問題の所在と課題

「窮乏は、半世紀前では、少なくとも特殊技能のないすべての労働者の共通の運命であつた。⁽¹⁾」しかし、今日では「一般的な悩みとしての貧困は生産の増大によって解消した。……その結果、貧困は、大多数の人びとの問題から少数者の問題になり下つた。⁽²⁾」したがって「貧困を普遍的な悩み⁽³⁾」とすることは、「それはむしろ思いつきにすぎないであろう。⁽⁴⁾」と、ガルブレイス(Galbraith, J. K.)は言っている。

しかしながら、アプセーカー(Aptheker, H.)は、同じアメリカ社会について次のように言っている。

「実際にはアメリカ国内には、きわめて深刻な、目をおおうばかりの貧困、アメリカ社会構造の全面的研究をくわだてるほどの学者なら、それ自体としてもきわめて綿密な検討を要するほどの貧困のポケットが存在する。こうしたポケットのうちには、アメリカのあらゆる重要都市に存在する『細民街』、つまり、完全に打ちのめされ、遺棄された何万と

いう男女たちの『家庭』がある。また、アジアのインド人に匹敵する物質的、文化的窮乏の状態で生活している三五万のアメリカ・インディアンがある。つぎにニュー・イングランド諸地域や、中部および南部アラチア地域の織物・炭坑のような産業によって放棄された地域に住む何一〇万の人びとがある。……このほかになおアメリカには、数千万人をかぞえる大きな貧困層が実在している。これは資本主義を基礎とし、階級分化した社会の社会学的一面を反映するものであって、貧困の『プール』または『ポケット』あるいは『孤島の』ないし孤立した『例外』という概念とはなんの共通点もないし、『ゆたかな社会』(ガルブレイス)では貧困それ自体が全体として廃絶されたという概念と縁のないことは、いわずもがなである。⁽⁵⁾」

また、リューマー(Lumer, H.)は、この事体を次のように言っている。

「たしかに、個人の経済的地位は、かれがそのなかで一員となつていゝる社会の経済的地位との関連においてのみ規定できる。したがってその

かぎりでは貧困は相対的である。しかし、かれが当該社会のあたえうる基本的な生活条件を奪われているとしたら、そのかぎりではかれは絶対的意味においても貧困である。食べるものも十分でなく、水準以下の荒れ果てた住居にすみ、予防可能な病気に悩まされ、生命期待値が一〇年ないし一五年低められているとすれば、その人間は貧困であり、けっして比較的に貧しいのではない。

かれはまた、こうした状態が存在しなすむという意味でも貧困である。⁽⁶⁾

そしてまた、リューマーは、次のようにも言っている。

「戦時と戦後の比較的繁栄の時期には、貧困も退潮を示した。しかし、こうした例外的な事情が過ぎ去るとともに、また新しい技術革命の衝撃の増大とともに、貧困は新たに増大する気配をみせている。これは、われわれが普遍的豊富への大道をすすんでいるのではけっしてなく、貧民も見放された、減少しつつある残り滓ではけっしてないことを示しているのである。むしろ、干満をくりかえす貧困は、われわれの資本主義経済に固有の一条件なのである。」⁽⁷⁾

「自由」で「ゆたかな」「偉大な社会」であるアメリカにおいてこうであるとするならば、貧困の問題は、わが国においても例外ではありえない。

例えば、アメリカをはじめとする石油独占資本の日本への浸出にともなう、それに従属する形で後退しつつある石炭産業の「合理化」過程で現われた炭坑労働者の生活の状態を見ると、その「合理化」によって、九州だけでも、五三年―六三年の一〇年間に、炭鉱数にして二四五の閉山、実働労働者数にして一四一、八九一名にのぼる減少を見せている。

それを、福岡県内の石炭鉱業および関連産業の失業者の発生状況によって見ると、五五年―六二年一〇月までの期間で、七〇、〇五一人に達する。それをさらに生活保護率と人員について見ると、六二年六月現在で、全国で第一位の保護率、四八・六、人員で一九四、六一五人、なかでも産炭地五市三郡の平均保護率は、一〇四・六（いずれも人口一、〇〇〇分比）で、人員にして九三、八一九人に達する。しかし、このことは炭鉱「合理化」によってつくられた貧困者のすべてが、保護の適用を受け、生活の保障がされていることを意味しない。それは、生活保護の適用「正常化」の理由で、適用の抑制が行政指導されていることとの関連で見られなければならない。

その上に「筑豊はク保護天国」だ、という者がいる。おびたしい炭鉱失業者群が生活保護のうえにあぐらをかいて、積極的な自立の意志と労働意欲を喪失してしまっているというわけである。はたしてそうであるのか。私の眼には、まったく逆にク保護地獄だ。必死に這いのぼろうとしてあがけばあがくほど、ますます深みにずりおちてゆくク蟻地獄⁽⁸⁾さながらのク保護地獄だ。」

なぜかなら、

「私の住んでいる地区は三級地であるが、そのばあい、満二〇才から四〇才までの成年男子の生保金額は、一カ月の主食費一三六五円、副食費の魚介一二二〇円、野菜六三五円、その他三六〇円、あわせて三五八〇円の飲食物費と、別に諸経費一〇二〇円を加算しての合計四六〇〇円である。したがって、この基準どおりに生活を営もうとするならば、一日三食として一食平均四〇円弱、全支給額を食費にあてるとしても一食平

均は一円強にしかないのだ。あぐらのかける生活保護であるかどうかは、小学校の一年生でも判断できるにちがいない。⁽⁹⁾」

からである。

このような「合理化」のあらしの中で、かろうじて閉山を引きのばした炭鉱でも、労働者の前にあるものは、過酷な労働強化と低賃金である。

「筑豊炭田におけるもっとも古い炭鉱町のひとつであり、麻生・伊藤とともに『筑豊御三家』のひとつに数えられる貝島炭鉱の創業の地として知られる香月町という、地下足袋の底のようなわびしい部落がある。

そしてここは今もなお貝島の経営するO炭鉱があり、S炭鉱はその租炭権炭鉱である。⁽¹⁰⁾」その炭鉱で、三三年四月から閉山された三四年六月までの一五ヶ月間に支給された賃金の内訳は、現金約一〇%、金巻（炭鉱の経営する売店にのみ通用する一種の商品巻、俗に「パッチン」と呼ばれる）約三〇%、米麦（不詳）であったという。⁽¹¹⁾

それは「どうせ一文のねうちもない紙屑ですけん、邪魔になるばかりし」のものに過ぎないわけだが、「ほんとうにこれが父ちゃんの命がけでもうけてきになった銭かと思うと、なさけのうして、なさけのうして……。

小学校二年になる子がこれを盗みだして、町にパンを買いにいったとですよ。そしたらですね、パン屋さんの『ほんとお金でないと売られん』ちうてことわらっしゃったげなすたい。それで子供の泣くなく帰ってきて『うちんがたん父ちゃんはどうしてウソのお金をもううてきたとか』ちうておこるとですよ。どういうてきかせても納得のいかんとですよ、こまいもんですけんねえ……」⁽¹²⁾

もちろん、これは「特殊」な例であるかも知れない。しかしながら、リユーマーも触れているように、資本制生産が主流をなす社会にあっては、生産技術の発達とその資本制的充用によって生み出される失業と貧困は、さげがたい事実である。また、「国際競争力の育成」の名によって行こなわれる「産業構造の再編」や「経済の高度成長」のもとで、「技術革新」や「産業構造の再編強化」と不可分に結びついて強行される「合理化」が、日本のあらゆる産業を、その渦中に引き入れる状態にあっては、炭鉱「合理化」の底を流れている基本的要因と、その本質においてとは同じものである。

一般的に述べる事が許されるならば、社会の何らかの変動、または発展の過程で、家族とその生活が、また何らかの変化、影響を受けることは認めざるをえないであろう。

そこで、上に見たような、家族の崩壊の現象をとまなう貧困化現象、それを今「生活問題」と呼ぶならば、その「生活問題」に対して、社会学は、どのような理論を用意しており、どれほどの理論的有効性を持ちうるのか、それを、家族という一つの生活の単位の中で確認しようとするのが本稿の課題である。さらに、そのことを通して、現実の生活問題に接近する場合の有効な枠組を検討する試みが、同時に本稿に果せられている。

注 (1) Galbraith, J. K., *The Affluent Society*, Boston: Houghton

Mifflin, 1958. 鈴木哲太郎訳『ゆたかな社会』岩波書店 二九七頁。

(2) Galbraith, J. K., *ibid.*, 二九七頁。

(3) Galbraith, J. K., *ibid.*, 二九七頁。

(4) Galbraith, J. K., *ibid.*, 二九七頁。

(5) Aptheker, H., *The world of C. Wright Mills*, New York: Marzani

& Munsell Inc., 1960. 陸井三郎訳『ライト・ミルズの世界』青木書店 六二頁—六三頁。

(9) Lumer, H., *Poverty: Its Roots and its Future, International Publishers*, New York, 1965. 陸井三郎ほか訳『アメリカ貧乏物語』青木書店 一八頁。

(7) Lumer, H., *ibid.*, 四九頁。

(8) 上野英信「廃坑の底にうごめくもの」現代の眼、一九六七年一月号 九八頁。

(9) 上野英信 前掲、九八頁—九九頁。

(10) 上野英信『追われゆく坑夫たち』岩波書店 一九六〇 二頁。

(11) 上野英信 前掲 八頁—九頁。

(12) 上野英信 前掲 一二頁。

二 「社会変動」と家族生活

「社会変動」という概念を、広義には「社会の変化」一般を表わすもの、として一応置くとすれば、その意味での「社会変動」の理論は、社会学において古い歴史を持っている。

コント (Comte, A.) は、フランス革命後の社会の「危機」的状况を前にして、旧社会の「瓦解」と新社会の「再組織」という対抗的運動の中から誕生するはずであった「理性の王国」の建設が、フランス革命そのものを用意した啓蒙主義的批判精神によって追撃されていると考えた。「旧組織」のほぼ完全な「瓦解」の上に「新組織の形成に着手することが可能となった」⁽¹⁾からには、「旧組織」の破壊に役立った「批判的原理をば有機的原理として示す」⁽²⁾ことによって「新社会組織の形成」に向けるべきであるとした。この「新社会」は「産業的社会」であり、これに照応するのが、人間精神の「実証的段階」であったのは周知の通

りである。コントの「実証哲学」が「秩序と進歩」を基礎的理念とすることは、人のよく知る所であるが、社会の「危機」的状况の中で「進歩」よりはむしろ「秩序」に重点を置いていたことから、革命後の混乱の中で再組織さるべき社会は、その自らの論理によって矛盾を内包する資本主義社会そのものでしかなかった。したがって「社会再組織」の理論は、そのような資本主義社会を「人類の本性に最も適合した状態」⁽³⁾と見なして、その「秩序」を維持する理論なのであった。コントは、人間精神の進化過程を「神学的」「形而上学的」「実証的」という「三段階の法則」(for des trois états)によって進化するとしたが、社会進化もそのそれぞれに照応的な「軍事的」「法律的」「産業的」という時期を通じて進化すると考えた。この進化の行きつく所は上に見た通りである。

コントが、革命後の混乱の時期に「社会再組織」を考えたのに較べて、スペンサー (Spencer, H.) は、資本主義的商品交換が一応の発展を遂げた時期のイギリスに、「平等な自由の法則」(law of equal freedom)にもとづく「自発的協同」⁽⁴⁾(a voluntary co-operation)の支配する「産業社会」を見た。それは、集権的な「強制的協同」(a compulsory co-operation)の支配する「軍事型社会」の集中的規制装置が、社会進化の過程で分散し、平等の個人的自由を基礎を置く分権によって形成せられるものとした。⁽⁵⁾周知のように、それは、物質の総合と運動の分散によって説明される「進化」⁽⁶⁾の超有機体Ⅱ社会有機体への適応によって示されるものである。スペンサーの「軍事型」から「産業型」への社会進化論は、進化論的「適者生存」(survival of the fittest)の原理による徹

底した自由主義、個人主義の見地から、形式的には商品交換の平等性と自由を「理念」としながらも、その発展の内在的矛盾である資本の集中・独占によって、階級的分離と対立を必然化し、平等と自由を形骸化する資本主義社会が、「完全社会の均衡」(equilibrium of a perfect society)をもった「平等な自由の法則」を実現させる社会として描き出されるものであった。

このように、社会学の始祖における社会有機体説からする「綜合社会学」にあつては、その「社会變動」の理論も、壮大な理論体系において、おのずから社会の全体的變動を説明しようとする広がりをも、それなりに持つてはいた。しかしながら、それはまた「資本主義的近代社会の自己意識として成立したのと同時にそれは本質的には急激な社会的變動と危機の産物」⁽⁷⁾でもあった。

さて、資本主義社会の発展の途上で、「近代市民社会」のイデオロギ―として世に出た社会学が、封建制から資本制確立への變動と混乱のなかにあつて、社会発展の法則的必然性と資本制的な階級分離と対立激化を導き出せずに、「近代市民社会」の「秩序」と「均衡」の理論を構築した時期に、人々の家族生活はどのような変化を受けていたであろうか。革命前のフランスにおいて、人口の大部分を占めていた農民層にあっては、その家族秩序は「家父長の権威」と「共同体的規範」⁽⁸⁾によって維持されていた。しかし、農村において資本制生産の初源的形態としての手工業的協業と分業が発展しはじめると、その生産形態とそのもとで発展する自由な商品交換の中に農民層をまき込むこととなり、封建制内部での資本制的階級分解を引き起こさずにはおかなかった。⁽⁹⁾このように、封建制

内部における資本制的生産の発展は、封建的諸関係に対抗的に現われる自由な商品交換の論理によって、人々の社会的諸関係を構成しはじめる。この事体の諸過程を一つの段階において完成させたのが、ブルジョア革命の古典的意味を持って語られるフランス革命であった。

資本制生産様式は、そのもとでは桎梏であつた封建的外枠が打ち壊されるときに、急速に発展した。この資本制生産様式の一層の発展は、他方では、封建制社会における私的所有の封建的形態と秩序に照応していた家父長制家族の制度的紐帯から人々を解放し、商品交換の平等性と自由の理念に基礎づけられた「家族員相互の平等」と、彼等の間での自由な「契約」⁽¹⁰⁾にもとづく「新しき家族関係」を成立させる物的基盤を用意した。

しかしながら、かかる物的基盤を成熟させ、人々を、とりわけ婦人を封建的家内奴隷から分離するためには、資本制生産の機械制大工業への発展をまたねばならなかった。

ところで、資本制生産様式の確立を導いた「産業革命」は、新しく発明・発見された機械や技術の資本制的利用を増大させたが、それは労働の社会的生産力を飛躍的に高めるとともに、生産手段の私的所有者として立ち現われた資本家の側では剰余価値生産を発展させる手段となった。したがって、一方の極には富の急速な蓄積が現われ、他方の極では、それは、「汗を絞り取る方法」に転変し貧困が蓄積される。また、そのことは古い封建的生産関係から人々を解放するとともに、資本の集中にもなう大資本による中・小資本の収奪が現われる*。

* 大都市では、工業や商業がもつとも完全に発達するので、それだけにこの大都市では、プロレタリアートにたいするこの発達の影響もまたもつとも明瞭に、そしてもつとも公然とあらわれる。ここでは、所有の集中が最高点に達している。ここでは、ありしよき日の慣習や関係は根こそぎに絶滅されている。ここでは、「むかしの楽しいイギリス」(old merry England)というよび名を聞いても、もはやなに一つおもいうかべることができないほど、ひどくなっている。……したがってここではまた、小ブルジョアジ―が日ごとにますます消滅していくので、富裕な階級と貧困な階級とがあるだけである。小ブルジョアジ―、すなわち以前はもつとも安定していた階級は、いまではもつとも動揺している階級となっている。この階級は、いまでも、過ぎ去った時代の少数の生き残りとして、一財産つくりたがっている一群の連中、すなわち完全な高等詐欺師と投機師とからなりたっているにすぎない。これらの詐欺師や投機師のうち、一人が富めば他の九九人は破産し、しかもこの九九人のうちの半数以上は、破産を利用して生活している。⁽¹¹⁾

さらに、資本制的人口法則の貫徹によって、相対的過剰人口・産業予備軍を創出し、また自らの労働力を売る以外には生活を維持し得ない階級、労働者階級を、その発展の主要な要素として作り出す。こうして、資本制生産の発展は資本の論理を貫徹させるが、そのもとで現われるたとえば蓄積・集中の運動は、上に触れたように小生産者をもその過程にまきこみ、資本の所有に基本的には基礎を置く階級支配を完成させ、膨大な労働者、諸階層を資本の専制的支配のもとに針づけにする*。

* 自由な労働者……が財産——労働手段と享楽手段の所有——を、失う、度合に応じて、またかれらが、四囲の事情のために、すなわち他の方法で生活することが不可能であるために、自己の労働力を貨幣で売ること余儀なくされる……、単純な労働力の単なる所有者にまで分化し一般化する度合

に応じて、ゲゼルシャフトにおける、したがってこの自由なる労働者に関する、またこの自由な労働者に対する、自由なる商人あるいは資本家たちの自然的な支配が実現される——自由な労働者の自由にもかかわらず、それは現実的な支配となるのである。⁽¹²⁾

かかる諸過程を一そう押し進めるものとしての、機械の進歩とそれの資本制的充用は、マニュファクチュア的分業を機械の作業工程による分業に置き換え、生産過程を細分化し、労働の部分的または従属的性格を促進させ、生産の全過程における「特殊的諸過程の連続」した「編制された機械体系」の中の、特殊的一過程に對置された労働の形態、部分的従属的労働形態を必然のものとする*。かかる労働形態の一般化は、生産過程から熟練労働者を追放するとともに、いまや性と年令の制約を超えて婦人や子供までも、この形態での生産過程に引き入れることを可能にする。

* 生産組織内に機械として結びつけられている器具は、労働者を待たせ、かれらを支配しながら活動している。⁽¹³⁾

この労働形態は、労働者の人間的諸能力の全面的発達という点から見れば、労働の奇形的形態であり、労働者にとっては一種の技術的奇形を「発達」させる形態であるが、それはまた、たとえば労働時間の延長と労働密度の強度化と結びついて、身体的にも精神的にも一種の奇形と頽廢を社会的問題として提起する。

資本制生産様式の発展は、資本の蓄積・集中の過程で、小生産者をもその過程にまきこみながら、労働者の状態の悪化、貧困化をとまなっている。こうして、資本家階級と労働者階級は、社会的生産活動における位置

と役割の関係として、生産手段の所有関係として、したがって社会的富の分配関係として、かかる階級関係を対立的に仕立て上げて行くのであるが、この対立的階級関係は、両者の家族生活の側面にも反映している。すなわち、資本の利潤追求の無政府的発展のなかで、他人の労働によって作り出された富を基に「衛示的消費」⁽¹⁴⁾を行うブルジョア家族の生活と、貧困化し、たえず生活不安におびやかされ、家族皆稼働化と頽廢の中で破壊されつつあるプロレタリアート家族の生活である*。

* このようにして、社会秩序は労働者の家庭生活をほとんど不可能にしてしまう。住み心地のわるい不潔な家は、夜の宿としてさえろくに役だたず、家具の備えつけはわるく、しばしば雨もりが放置され、暖房の施設はなく、人間でいっばいになった室内の息苦しい空気は、家庭に腰をおちつけることを許さない。夫は一日じゅう働き、たぶん妻や年かさの子供たちもみんなべつの場所で働いていて、家族の者が顔をあわせるのは朝と晩だけである——そのうえ、たえず火酒を飲むことへの誘惑がある。このような事情のもとで、いったいどこに家庭生活がありうるであろうか？ それでもなお労働者は、家族からのがれでることはできない。労働者は家族のなかで生活しなければならない。そしてその結果は、家庭の混乱と家内のけんかであって、これが夫婦にたいしても、ことにその子供たちにたいしても、極度に墮落的な影響をあたえるのである。あらゆる家庭的義務をおろそかにし、わけても子供をおろそかにすることは、イギリスの労働者のあいだに頻繁すぎるほどおこっており、また現在の社会秩序によって驚くほどおこっている⁽¹⁵⁾。

労働者家族にあつては、さらに、生活の物的要素の減少に見あう程度に家族員数の減少が現われ、就業の多様化ともかわつて、個別分散的形態を促進させるが、そのことは、また、一方において社会的富の私的所有と、その継承から解放されることによって、自由な人格的結合を可

能にする条件が作り出される。

注 (1) Comte, A., *Plan des travaux scientifiques nécessaires pour réorganiser la société*. 1824. 飛沢謙一訳『社会再組織の科学的基礎』岩波書店、一九五四年、六頁。

(2) Comte, A., *ibid.*, 一三頁。

(3) Comte, A., *ibid.*, 六頁。

(4) Spencer, H., *Social statics*, 1883, P. 217.

(5) Spencer, H., *ibid.*, P. 557.

(6) Spencer, H., *First Principles*, 1883, 4. ed., P. 396. 沢田謙訳『第一原理』世界大思想全集二八、春秋社、一九二七。

(7) 安西文夫「イギリス社会学」阿閉・内藤編『社会学史』学苑社、一九五二、所収、一四一頁。

(8) 遅塚忠躬「フランス革命と家族」中川善之助ほか編『家庭問題と家族法』酒井書店、一九五七、一一一頁。

(9) 遅塚忠躬 前掲、一一四～一一五頁。

(10) 遅塚忠躬 前掲、一二五頁。

(11) Engels, Friedrich., "Die Lage der arbeitenden Klasse in England. Nach eigener Anschauung und authentischen Quellen," Leipzig 1845. 209-506. 杉本俊郎訳「イギリスにおける労働者階級の状態——著者自身の観察および確実な文献による」『全集』2、二四九頁。

(12) Tönnies, F., *Gemeinschaft und Gesellschaft: Grundbegriffe der reinen Soziologie*, 1887. 杉之原寿一訳『ゲマインシャフトとゼンシャフト——純粹社会学の基本概念——』岩波書店、上、一二七頁。

(13) Tönnies, F., *ibid.*, 一五四頁。

(14) Veblen, B. Thorstein, *The Theory of Leisure class: An Economic Study in the Evolution of Institutions*, New York, 1899. 小原敬士訳『有閑階級の理論』岩波書店、七〇頁。

(15) Engels, Friedrich. op. cit., 三六一頁—三六二頁。

三 「家族変化」の社会学的理論

前項において、封建制から資本制への社会の歴史的「変動」と資本制生産そのものの発展過程の中で、社会学的「社会変動」論は、その「変動」の内から再建されなければならなかった「近代市民社会」とその「秩序」が、封建的な鎖を解き放たれ、独自の法則によって発展しはじめることによって起った「混乱」を、一つの危機として受け取って行くのであるが、その過程で、その理論は、「予見」を、つまり歴史的発展に対する客観性を放棄し、「近代市民社会」の「秩序」を「再組織」する願望、ブルジョアジーのイデオロギーに転化する性格を持っていたことを見た。

しかしながら、上に見たように、事体の進行は、その市民的願望を超えて、「混乱」の中から、一つの対立的「秩序」、つまり相対立する階級関係を成熟させて行くのであるが、それは資本制生産そのものの体内における循と矛の関係なのであった。

そして、この事体の進行過程で出現する近代的家族問題は、その対立的な階級関係の枠内で、階級的問題として現実的に問題を露呈させていたのであった。

さて、ここでは、その問題を「家族変化」という観点から見た場合、社会学はそれをどのように捉えているかを検討することにした。その場合、「社会変動」と「家族変化」の関係について、「古典的業績」を残してきた、オグバーン(Ogburn, W. F.)とバージェス(Burgess, E. W.)の見解を、一応検討対象とし、それらが持っている理論体系が、「家族

変化」にもなって現われる現実の家族問題または家族の生活問題に対して、どのような有効性を保持しえているかということを中心にして、考察を進めて行きたい。

まづ、「家庭的な単位の主要な形態と機能が、産業化と都市化の近代的圧迫の衝撃のもとで変化しつつある状態を明瞭に説明した。」⁽¹⁾と言われている、オグバーンについて見ることから始めることにしたい。

オグバーンは、「産業化」や「都市化」による「社会変動」との関係で、家族生活の「変化」を捉える場合、周知のように、それは家族機能の分化という観点から捉えるのであるが、後で見るとそれは「文化的社会変動論」と無関係ではない。オグバーンは、家族生活の「変化」を考察した文献において、一、家族の制度的諸機能の衰退、二、家族のパーソナリティ機能の重要性の高まり⁽²⁾を指摘するのであるが、それを少し詳細に見ると次のようになる。

「植民地時代のアメリカにおいては、家族が重要な経済的組織であった、……家族は実際上家庭で消費する総てを生産した。家庭はつまり工場であった。文明は、家族を中心とする生産の家内体系に基礎づけられていた。家族の経済的な力は、それに相應する社会的状態を作り出した。結婚の時、男は、単に配偶者や友達としてではなく、仕事の協力者を求めた。夫婦は互いに専門化された技術を持ち、協同作業に一定の任務を果たした。子供はその時代の法律が示したように、単なる愛情の対象としてだけではなく、生産的行為者としても考えられた。結婚年令、出産率と離婚に対する態度は、家庭が一つの経済的制度であるという実事によって影響されていた。」

「しかし、マニファクチュアー的技術が発達し、経済的な分業が行い、貿易が発展するに伴って変化した。……マニファクチュアーはまず都市家庭において専門化されたが、蒸気力の導入と機械的発明の発生に伴い、それは工場に移って行った。市場と鉄道が都市の発展を刺激した。」それとともに、各種の生産的機能——家具、繊維、衣服、薬品、皮革の生産——が家庭から分離して行った。「これら経済的諸機能の喪失は、社会における女性の位置、家族の安定性、出産率を含めて、多くの社会問題の要因になった。」

それと同様に、家族の他の機能も喪失した。例えば、保護機能は警察、学校、裁判所、法律が代行するようになり、宗教的儀礼は喪失し、娯楽は利潤の為の売買の対象になり、大人も子供も、家族の氏の担い手としてではなく、より個人として考えられるようになった。

また、このような歴史的变化は、家族の構造的変化なくしては起こらず、家族員数は減少し、また別居や離婚のために欠損家庭が多くなっている。そして家族構造は多様化して、農村、都市、山村などで家族の構造は異り様々なものが現れて来ている。

このような中で、パーソナリティ機能も、子供の減少や子供のない家族の増加によって、また学校の増加、家族外の接触の機会の広がりによって、影響を受けているが、制度的諸機能が減退したので、比較的重要になって来ている。したがって「今では、家族は、子供の養育と幸福のために与えられている組織として考えられるよりも、単一の経済組織として考えられることの方がより少ないのである。このように、今日では、家族成員は非常に個別化している。」⁽³⁾

以上がオグバーンの論点であるが、それは要するに、植民地時代の自足的経済組織としての家族は、その経済的基盤に照応的な制度的共同文化を持っていたが、手工業的技術が発明(発見)によって発達し、マニファクチュアー的技術や機械制が現われると、分業、貿易が市場と鉄道の発達にうながされて発展し、家族が持っていた自足的経済組織としての機能が家族外の諸機関に分化した。それにともなう、女性の地位や家族の安定性の欠如などが現れ、制度的機能の減退とともに個人化した家族員に対するパーソナリティ機能が比較的重要になって来た。とすることにある。

アメリカにおける資本主義の発展は、ヨーロッパにおけるそれとは、その初源において、若干の特殊の性格を有していたとはいえ、資本制生産の発展における基本的、したがって一般的な法則から自由なわけではなく、オグバーンの持っている、すぐれて経済史的な分析の側面は、しかしながらその文化主義的観点から一步も出ることがなく、前項で見たように、手工業からマニファクチュアーへの生産形態の発展が、対立的な階級関係を成熟させるのであるが、その機械制への発展が、その関係を完成させ、その過程で現れる資本の集中とその所有からの排除という、いわば分離と対立の中に、「家族の自足的経済組織としての機能」の減少にともなう「制度的機能」の家族外への分化を捉えず、むしろ現象としての「機能分化」から家族生活の様式の変化を捉える機能論的現象論になっており、あとで見えるように、その変化を文化主義的一元論から説明しようとするところから、社会の歴史的発展法則と階級関係を看過することになり、その階級的枠組の中で対立的に現れる生活の階級的様

態が、それらを捨象して、一般的に家族成員の個人化と心理的次元での相互関係としてのパーソナリティ機能の重視として捉えられることになっている。

しかし、このことは、オグバーンの『社会変動論⁽⁴⁾』における文化主義的観点と無関係ではない。それは周知のように、社会的現象を人間の本質的性質と文化との複合作用として捉え、「変動」するのは文化である、とするのであるが、「文化」は文化的基底と社会的要請から生れる発明と発見、その蓄積、その他の社会への伝播、それえの適応によって累積される。この場合、「文化」は大きくは二つに分けられる。すなわち「物質文化」と「非物質文化」である。急速に発展する「物質文化」は、発明や発見によって付加的に蓄積を早めるが、この「物質文化」の発展に遅れた「非物質文化」の前者への適応(適応文化)は、同時的には行なわれず、そこにギャップが生ずるが、これが「文化的遅滞」(Cultural lag)として捉えられるものであった。したがって、「社会変動」の主動因は「文化」であり、とりわけ「物質文化」は「文化的先導」(Cultural lead)の役割を果すものとされた。

したがって、オグバーンにおいて問題にされるのは、ますます激化せざるを得ない対立的階級関係とそれを必然化する歴史発展の法則の解明とその止揚運動ではなく、産業革命を契機とする機械制大工業の急速な発展によって引起こされる遅滞現象としての人間の生活様式の不均衡——機能分化による離婚の増加、家族成員の個人化——が、新しい調整によって、機械制のもとで開花した物質文化に適応することであった訳である。

その意味では、同様な傾向を家族変化に見るバージェスは、周知のように「制度から友愛へ」という家族の変化を、社会の変化の中の家族変化の「理念型」として導き出すのであるが、それは、法律・民習・世論・慣習・家長の権威・訓練・儀式などが、外的な形式的諸要因として、より重要視される「制度型家族」が、社会変化に適応して行く過程であり、民主主義・自由・個人主義などのアメリカ的理念によって例証される自然的愛着、人間の相互関係、相互理解または成員の友好的関係を強調する「友愛型家族」へ適応的变化をどける再組織過程である。とする。そして、「アメリカ家族」の示す家族過程の個別的諸傾向を、次のように示している。

- 1 限定性と適応性。急速な社会変化の状態に応じる。
- 2 都市化。都市に生活する家族の比率の増加という観点ばかりではなく、都市と同様に農村においても、家族が都市的生活様式に適応しつつあることを含めて。
- 3 俗化。衰退しつつある宗教的拘束に伴い、また物質的安楽、労働節約計画、またはその他の自動車、ラジオ、テレビのような機械的装置の増加しつつある役割の摂取に伴う。
- 4 不安定性。一九四五年には、総ての結婚の三分の一に達する離婚の継続的増加によって証明される。
- 5 専門化。経済的生産、教育、宗教的訓練、保護などの外部からの機能の消失に導かれる、愛情授受、子供の出産と養育、パーソナリティ発達の諸機能における。
- 6 友愛への傾向。世論、共通関心、民主的關係、家族員の個人的幸

福の強調に伴う。⁽⁵⁾

バージェスによれば、これらの諸傾向は、従来から組織の分裂、態度や行為の分裂として捉えられて来た(例えば、離婚率の増加、少年犯罪の増加現象)「家族解体」(Family disorganization)としてではなく、それは「再組織へと調和しつつある重要な機能と同様であることもまればではない。⁽⁶⁾」のであるから、家族の再組織過程として、つまり「(1)、個々の家族の解体の傾向を防止し、また夫と妻、親と子の態度や価値を再び明確にすることによって再構成し、(2)家族員を個人として、また集合体として実現させることを試みる社会発展に伴う家族の新しい概念」⁽⁷⁾として考えられている。

オグバーンは、「物質文化」の急速な発展にともなう「遅滞現象」として、家族の制度的機能の分化、不安定性、成員の個人化による不均衡が、新しい調整のもとで、発展した「物質文化」への適応過程で、家族においてパーソナリティ機能の相対的重視となって現れるのを見たが、バージェスは、社会変化(農村的生活様式から都会的生活様式への変化)に、家族が適応し、「再組織」される過程として「制度型家族」から「友愛型家族」への適応的变化を描き出そうとした。それは、まさにアメリカ的「民主主義、自由、個人主義」を基本理念とする「近代市民社会」における人間の「相互関係、相互理解、友好的関係」によって実現さるべき人間集団としての家族が、一つの「理念型」⁽⁸⁾として、資本制生産を土台とする「市民的秩序」の家族的体現として描かれている。

「しかし、この友愛的家族は理想ではあるが、それは一千年の後に達成されるかも知れない理想であって、恐らく資本主義社会では実現不

可能なものであろう。なぜならば、資本主義社会は、被搾取階級とともに女性をつねに劣位におくことによってのみ維持される社会だからである。⁽⁹⁾」

とする指摘は、そのかぎりでは全く正当なものと言えよう。したがって、現代の家族の様態は、社会の資本主義的工業化にともなって現れる龐大な労働者の貧困化と家族皆稼働化現象が、労働力供給の多元化とかかわっており、この過程で現れる家族機能の分散化・縮小化と家族的紐帯の弛緩によって、独自の、包括的な制度的体系が喪失して行く過程で、生活の共同性が失なわれ個別分散的形態となって現われるのであるが、この分散的であるが故に他方においての資本の集中・独占が支配の統合をなしとげ、その統一的な支配機構の中にまさに分散的にまき込まれざるをえないという形態なのであって、それは、かかる体制原理において一面での被支配の同質性を必然化し、被支配の「平等性」を与えることになる。これが、対自的階級として現れた一定部分によって自覚される時、自らの存在の合法則性の故に、新しい共同性、連帯を獲得する基礎を与えることにもなるが、小市民的分散形態にあっては、家族ぐるみ体制原理にまき込まれ、体制的集団原理の枠内において、疑似的共同体、みせかけの共同としての友愛関係を保守することとなる。⁽¹⁰⁾

注 (1) Smith, T. L., & Mcmahon, C. A., ed., *The Sociology of Urban Life*, The Dryden Press, 1951, P. 449.

(2) Ogburn, W. F., "The Family and Its Functions" in: *Recent Social Trends in the United States*, Vol. I, pp. 661-679, reprinted in: Smith, T. L., & Mcmahon, C. A., ed., *ibid.*, pp. 440-451.

(3) Ogburn, W. F., *ibid.*, pp. 450-451. なお、引用部分の後の論稿におい

- て、「経済制度としての家族」「家族のその他の制度的機能」について、統計資料にもとづいて分析しているの¹⁾、それも参照されたい。
- (4) Ogburn, W. F., *Social Change, with Respect to Culture and Original Nature*, 1922, new ed., 1950.
- (5) Burgess, E. W., "The Family in a Changing Society," A. J. S., Vol. 53 (May 1948) p. 417.
- (6) Burgess, E. W., *The Family, from Institution to Companionship*, with Locke, H. J., 1945, p. 713.
- (7) Burgess, E. W., *ibid.*, p. 708.
- (8) Burgess, E. W., *op. cit.*, (5) p. 417.
- (9) 城下利雄「アメリカ資本主義の発達と家族」中川善之助ほか編『家族問題と家族法』酒井書店 一九五七 所収 一六四頁。
- (10) 玉水「親子関係の社会学的研究(その1)」駒沢女子短期大学「研究紀要」創刊号 一九六六 六五頁―六七頁。また、そのきわめて簡単な要約として駒沢女子短期大学「研究会報」2 一九六七 七頁―八頁を参照されたい。

四 「地域変容」と家族生活

バージェス (Burgess, E. W.) は、また都市の生態学的研究において多くの業績がある。なかでも、都市地域の同心円的發展の理論、いわゆる「都市同心円地帯理論」は、それ以後の都市社会研究に大きな影響を与えた。

モウラー (Mowrer, E. W.) は、この「都市同心円地帯理論」を用いて、都市の家族生活の類型と都市の生態学的地帯との関係を明らかにしようとした。⁽¹⁾

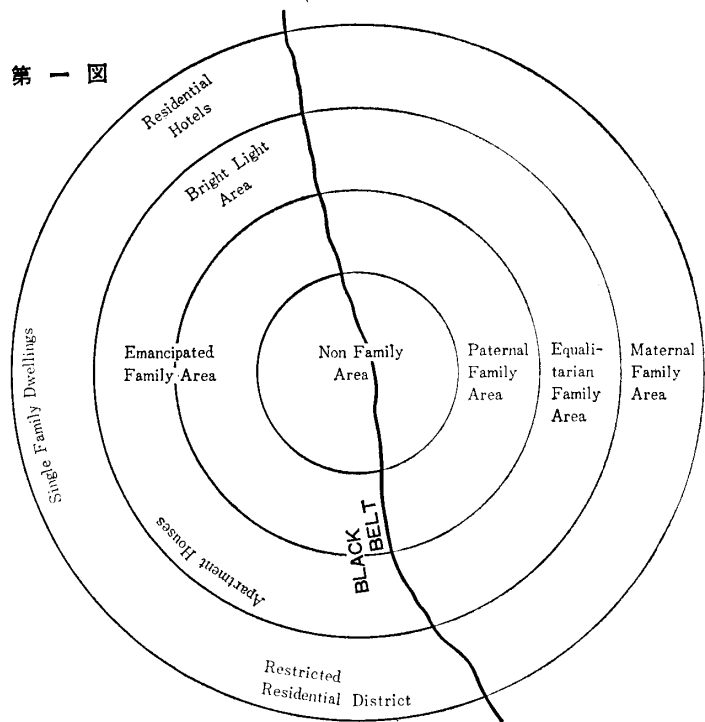
モウラーは、「都市の地帯 (area) は、それぞれの地域に見られる家族生活の型によって分類される⁽²⁾」として、シカゴを次の五つのタイプの地

帯に分けた。「(一) 非家族地帯、(二) 解放家族地帯、(三) 父権家族地帯、(四) 平等家族地帯、(五) 母権家族地帯⁽³⁾」がそれである。

そして、(一) 非家族地帯は、主に男性地帯で、都市の発展と共に都心またはそれに類似した場所になる傾向がある。(二) 解放家族地帯は、貸住宅地帯、台所付アパート地帯、居住ホテル地帯で、近隣関係は薄く、夫婦とも関心は家の外にあり、ほとんど共稼ぎである。(三) 父権家族地帯は、プロレタリアートと移民の地帯で、夫が家の支配権を持つており、大家族で、妻の関心は家事と子供の世話にある。(四) 平等家族地帯は、中間階級と専門家階級の地帯で、子供のいる小家族であり、夫婦間の上位と下位の関係は最小、妻は子供を子守にまかせて外に関心を向けている。代表的な住宅地帯である。(五) 母権家族地帯は、通勤者地帯であって、バンガローや広い庭のある郊外地帯で、子供があり、主に上流ブルジョアジーの地帯である。近隣関係は、夫が働いている為に妻が家族を代表する傾向がある。としている。

この家族生活の型によって分類された地帯と、バージェスの「同心円地帯」とを相関させたのが第一図である。

この図の第一の円は、非家族地帯で、下町の商業地帯とそれに接する地帯を含む。第二の円は、父権家族地帯で、地価が高く、商工業の発達によってそれが浸入して来る、さらに悪徳地帯でもある。第三の円は、平等家族地帯で、移動の多いアパート地帯 (通勤地帯) である。第四の円は、母権家族地帯で、建築制限を受けた大きな独立家屋である。⁽⁴⁾ さらに、モウラーは、この地域分化が家族解体とどのような関係にあるかを見ている。



Family Area in Chicago, 1920.

まず、その分化を都市の発達にともなうものとして、その諸要因を、輸送機関、コミュニケーション体系、産業の発展、発明・発見において考察し、「都市の発達の中で地域社会（Community）が分化して来る。

第一に、人口分布の淘汰力として作用する構造において、第二に、異った地方集団に作用するような制度において。結果は、種々の形態に家族を形づける文化的地帯の広い多様性を都市に与えることになる。」とし、次に、シカゴの地域社会を、離婚と遺棄の分布によって、（一）離婚も遺棄もない地帯、（二）遺棄だけの地帯、（三）離婚だけの地帯、（四）離婚も遺棄もある地帯に分類し、これを上の家族生活の類型と対比させ

ている。そして、「（一）母権家族地帯と家族崩壊のない地域。（二）父権家族地帯と遺棄だけの地域。（三）平等家族地帯と離婚・遺棄の両方のある地域、これは離婚だけの地域でもある。解放家族は、これらいづれとも生態学的に相関がない。」という結果をえている。

このモウラーの研究は、家族における権威の所在の形によって分類した家族生活の類型と、その地理的分布によって得た都市の地帯類型の相関を見た上で、その地帯類型と離婚や遺棄を主眼とした家族崩壊との相関を導出しようと試みた研究であると見てよい。

バージェスの「同心円地帯理論」は、言うまでもなく、バージェスもその一人である、パーク（Park, R. E.）' ヲッケンジー（McKenzie, R. D.）らを中心とする初期人間生態学理論を基礎にして、都市の一定住民が競争・共棲及び淘汰という生態学の原理によって地域的に分布されている形態を、一つの仮説として示したものであった。

このような、パークをはじめとする都市の人間生態学理論が、地域の生態学的形態と人口移動の問題を主要な関心事とした背景には、第一次世界大戦を契機として、生産と資本の急速な集積・集中を遂げたアメリカ独占資本が、その経済力と金融力を背景にして、ヨーロッパと植民地に対する支配と収奪を強めることによって、激化する矛盾をはらみながらも全般的危機からの一応の脱出を可能にした時期であり、このような一九二〇年代のアメリカ資本主義の特徴とその発展にともなう急速に発達したシカゴの工業都市化と鉄道の発達が、シカゴへの労働人口の吸引によって、シカゴにおける急激な人口膨脹をもたらしていた時期であったことを指摘して置かねばならない。

「地域」とは、その本来的な意味からすれば、自然地理学的概念を超えるものではない。しかし、それが人間の生活の様態との関連で問われる場合、単なる自然地理学的意味を超えて、人間生活の様態によって区切られる極めて社会的な概念となる。人間生活自体が、その生活の歴史的発展の基礎としての、生活資料や生産手段の生産力の発達を置くとき、「地域」もまた、この生産力の発達に基本的に規定された、分業、交換の発展、市場地の拡大、それによってうながされたその発展の手段ともなる輸送機関の発達などによって、その境界を画される人間生活の社会的範囲として、より社会的枠組を持つものである。

したがって、「地域」とは、人間の生活にとって単に与えられた地理的空間ではなく、社会の土台的規定要因の一定の発展段階に照応する人間の社会的諸関係によって、つまり、階級社会にあっては、支配階級の支配の機能範囲の内に位置づけられた存在様態を持つことになる。このような歴史的過程、すなわち、生産諸力の発達、分業の発展、交換の拡大によって、人間生活の社会的範囲としての「地域」は、その共同体的な包括性、自足性が消滅し、すぐれてゲゼルシャフトの規定性を持つことになり、資本主義社会にあっては、支配機能の集中、統合の進行過程で、生活の場所の様態を規定していた地縁の共同性が破壊され、その地域的特殊性は「国家権力によって裏打ちされた階級的支配の、地域的な存在形態⁽⁷⁾」としてのみその境界が確認されうることになる。

したがって、「地域」の構造的様態は、行政と資本の生活掌握によって区切られ、階級的支配と被支配の対抗的關係の中に位置づけられた「地域的生活」として把握される。

バージェス、モウラーなどの人間生態学理論からする生活研究が、生態学の原理にもとづく地域構造——それは、より正確に言えば、人間生活の現象面での種々の形態の地域上の分布によって分類され、構成されたものに過ぎないが——と家族生活の形態との相関を求めることに主眼を置いたのに対して、その後の、とりわけ都市研究における主要な傾向は、都市社会が、生態学的秩序にもとづく物質的構造をも含めて、社会関係、社会制度、社会集団、社会成層（階層）などから導き出される都市社会構造、都市住民の観念、態度、行為などの心理学的側面から導き出される都会人のパーソナリティ構造の三側面から構成される。として、研究自体も、それら三側面に対応的な、人間生態学的研究、社会構造論的研究、社会心理学的研究が存在し、それらの総合的研究、相互協力が必要である。とするワース(Wirth, L.)⁽⁸⁾らの見解が出されているのは周知の通りである。

ワースは「生活様式としての都市化」の現象をアーバンイズム(Urbanism)として据えるのであるが、本稿では、都市社会学、人間生態学的研究それ自体の詳細な検討を目的とするものではないので、機会を改めて考察されなければならないであろうが、バージェス、モウラーの家族生活の理論も、その理論的基盤としての人間生態学的観点から全く自由でありえないことを指摘しておかねばならない。

かかる都市の人間生態学的見地からすれば、都市家族の病理学的現象——離婚、遺棄などを指標とする家族の組織的崩壊過程——を、競争、集中、求心性、隔離、侵入、継承などの生態学的過程に基礎づけられる人口分布と居住地域の形態の相関によるところの、生態学的現象として

取扱うことにその関心が置かれる。

したがって、社会の全体状況の把握を指向すると考えられる人間生態学は、その見地からする人間の生活は、競争、共棲性及び淘汰などを原理とする自然経済に、より依存したものとされ、慣習と伝統による制度的・文化的構造によって、それら自然的経済的秩序——とりわけ、個人と個人の競争などに——制限を加えるのであるが、しかし自然的秩序は、その制度的・文化的な次に来る社会秩序の中に現われるのであって、自然的秩序そのものを根本的に変化させるのではない。⁽⁸⁾とするような、いわば生態学的決定論に基礎を置いた人間観から説明されることとなる。

しかしながら、人間は、自然的競争や共棲性または淘汰など自然的秩序において、自然的存在であるばかりではなく、自然史的過程の内に存在する自然存在であり、そのことによって社会史的過程における社会的存在である。また、人間は主要には自らの生活資料を生産する過程で、その生産対象としての自然的資源との間に、「労働」という生産的実践によって物質代謝を行う実践的存在である。この生活資料の生産力の発達に基本的には規定されて、この労働対象としての自然的資源を通して、また労働過程の共同を通して、集団的に、したがって社会的に他の人間と一定の社会的関係を取り結ぶのであるが、生産力の発展の一定の段階に照応する生産関係が、その生産力との照応において、人間の社会的諸関係の総体としての社会構成体をなしており、生産関係における人々の位置と役割の相異は、生活資料の生産手段の所有形態によって、そしてまた、それによって定まって来る生活の自然的資源たる生産対象そのものの所(占)有形態によって、社会的関係として現われる。

したがって、これらの諸過程の始まりとしての「労働」は、「一切の人間生活の第一の基礎条件である。しかもそれは或る意味では、労働が人間そのものを創り出したのだ、と言わなければならないほどのそういう程度にまで基礎的なものである。」⁽⁹⁾

人間生態等にあつては、この人間の自然に対する主体的力能、実践的主体としての人間を、自然的秩序の内に埋没させ、慣習や伝統によって作られる制度や文化として、また競争への反作用として捉えられているに過ぎない。

したがって人間の生活は、生産手段の所有関係の中に現れる、所有、非所有の対立的関係の中に、つまり階級関係の中に特定の位置づけられ、その階級的刻印は現実的な生活問題として現象している。

人間生態学は、人間の自然経済による物的関係からただちに人間生活を説明しようとする意味では、一種の非常に素朴な機械論的唯物論をなしており、人間の社会的関係の基礎的要件としての階級関係の分離と対立を、生物学的な個体的競争、淘汰の内に解消してしまっているというよう。

だから、マーチンデイル(Martindale, R.)によって、パーク・バージェス・マッケンジーの初期人間生態学から本質的にはそれらを前提とした最近の人間生態学をも含めて、生態学理論における「都市そのもの」の問題意識の欠如を指摘し、ついで、一、生態学的都市理論の研究は、都市の地域・居住地の特性にあまりにも重点が置かれ、このような地域的物質性を生み出した人間生活それ自体にはあまり関心が示されていない。二、その中枢概念が不必要に原始主義の形態をとっており、例え

ば、マッケンジーの競争、集中、求心性、隔離、侵入、継承などの概念は人間の生活ばかりではなく動物、植物界のそれにも妥当するであろう。⁽¹⁰⁾と言われるのは故ないことではない。

注 (1) Mowrer, E. W., "The Ecology of Family Disorganization," in

Mowrer, E. W., *Family Disorganization*, Univ. of Chicago press; Chicago, 1926, pp. 109-123. reprinted in ed. by Smith, T. L., & McNahan, C. A., op. cit., pp. 463-469.

(2) Mowrer, E. W., *ibid.*, p. 464.

(3) Mowrer, E. W., *ibid.*, p. 464.

(4) Mowrer, E. W., *ibid.*, p. 465.

(5) Mowrer, E. W., *ibid.*, p. 466.

(6) Mowrer, E. W., *ibid.*, pp. 467-469.

(7) 鈴木広「都市研究における中範囲理論の試み——都市共同体論覚書——」社会学評論「三五」一九五九 三三頁。

(8) Wirth, L., "Urbanism as a way of Life" A. J. S. Vol. 44, 1938. pp. 1-24.

(9) Park, R. E., "Human Ecology" A. J. S., Vol. 36, 1936, pp. 12-13. ベークの「人間生態学」についての紹介は、磯村英一『都市社会学研究』有斐閣「一九六二」二頁——一頁にくわしい。また、都市地域構造論については、大橋薫「都市地域構造論について」都市問題「四六」卷一二号（一九五五）（上）「同四七」卷一（一九五六）（下）にくわしむ。

(10) Engels, Friedrich; *Dialektik der Natur*, Dietz Verlag, Berlin, 1952. 田辺振太郎訳『自然の弁証法』（上）岩波書店「二三八」頁。

(11) Martindale, R., "The theory of the city" in *The City* by Maxweder, Translated and edited by Martindale, D. and Newirth, G., 1958. pp. 20-30. この紹介は、倉辻平治『都市の経済社会理論序説』ミネルバ書房 一九六一 一四〇頁——一四二頁。